

知的障害教育における国語、算数・数学科の指導Ⅱ

—「ラーニングマップ」を活用した学校経営・マネジメント・専門性の向上について—

企画者	山元薫(静岡大学)・笹原雄介(静岡県立伊豆の国特別支援学校教諭)
司会者	山元薫(静岡大学)
話題提供者	笹原雄介(静岡県立伊豆の国特別支援学校教諭) 立石宣堯(静岡大学教育実践高度化専攻 2 年、静岡県立浜北特別支援学校教諭) 早田公子(静岡県立伊豆の国特別支援学校校長)
指定討論者	菅野 敦(東京学芸大学名誉教授)

KEY WORDS:ラーニングマップ 知的障害 カリキュラム・マネジメント

【企画趣旨】

特別支援学校学習指導要領解説各教科等編(小学部・中学部)(文部科学省、2018)では、知的障害のある児童生徒に対する教育を行う特別支援学校の各教科について以下のように改訂された。一つめは各教科の目標や内容について、小学校との各教科等の目標や内容の連続性・関連性を整理し、充実・改善を図った。二つめは小中学部の各段階において、育成を目指す資質・能力を明確にすることで計画的な指導が行われるよう、教科の目標に基づき、各段階の目標を示した。三つめは、各段階間の内容の系統性の充実を図ったことである。あわせて、教科別に指導を行う場合、指導にあたっては、各教科の目標及び段階の目標を踏まえること、各教科等を合わせた指導を行う場合においても、各教科の目標を達成することになり、育成を目指す資質・能力を明確にするとある。指導者の立場に立ってみると、指導内容や指導項目が示されただけでは、知的障害の教科の指導は充実しない。それは、知的障害の児童生徒の指導には、発達段階、障害特性、生活の状況などを踏まえ、一人一人の学び方を踏まえることが重要だからである。そこで、共同研究者である笹原氏と共に「ラーニングマップ」を開発した(山元・笹原、2021)。この「ラーニングマップ」は、縦軸に発達段階を示し、横軸に教科の領域をとり、学習到達度によって児童生徒の発達段階を把握することができるマップである。あわせて、教科の内容の系統性を示しているので、目標の設定や指導の方向性を教師が把握しやすいといったメリットがある。昨年度のシンポジウムでは、「ラーニングマップ」の授業づくりへの活用について報告し、児童生徒の学習状況の把握、単元目標や授業目標の設定への有効性について明らかにすることができた。

本シンポジウムでは、「ラーニングマップ」の学校経営やカリキュラム・マネジメント、教師の専門性の向上への効果について検討したいと考える。笹原氏からは、「ラーニングマップ」の研修システムへの導入の成果と課題、立石氏からは、「ラーニングマップ」を活用したカリキュラム・マネジメントの電子システム化、早田氏からは、「ラーニングマップ」の学校経営への導入の成果と課題について話題提供をする。菅野氏からは、知的障害教育におけるカリキュラム・マネジメントの課題に対し、「ラーニングマップ」の活用の有用性の視点から指定討論をいただく。

【話題提供 1】笹原雄介氏

本話題提供では、校内研修において学校全体でラーニングマップを活用し、国語、算数・数学の実践の質的改善と教員集団の専門性の向上に取り組んでいる経過について報告する。校内研修では、ラーニングマップの活用を通して、児童生徒一人一人の学習状況の評価、学習状況に基づく適切な学習内容の選定、段階に応じた単元設定や展開、教材、指導の工夫について効率化、精緻化、明確化を図っている。ラーニ

ングマップを組織的に活用し、国語、算数・数学の系統性や段階ごとの有効な指導方略を整理する取り組みを行った成果と課題について検討する。また、本研修の効果検証として、授業づくりに関する「知識の獲得」、「意欲の想起」、「行動変容」、「成果の実感」の各項目について、本校教員を対象に質問紙調査を実施した。ラーニングマップを活用した研修システムが与える専門性向上への効果について、併せて検討する。

【話題提供 2】立石宣堯氏

実態把握、個別の指導計画、年間指導計画、単元計画、評価を「ラーニングマップ」でつなぎ、Excel を使用した電子システム開発を行った。このシステムを開発することにより、学習状況の把握から個別の指導計画、単元、授業目標の一連を画面上で管理することが可能になった。また、日々の子どものあらわれを入力することで、評価として反映され、次時又は次単元の最適な目標の候補が示されたり、現在の子どもの実態が即座にグラフ化され示されたりするように改良した。授業者は、本人と保護者のニーズ、生活状況からさらに最適な目標を考え、授業や指導改善が促されるといった教師の思考への効果を期待したいと考えている。このシステムがさらに進化することにより、学習指導要領の教科の内容を軸とした、指導と評価の一体化を可能とし、教育課程が二重構造をとる知的障害教育におけるカリキュラム・マネジメントの課題を克服できるのではないかと考える。

【話題提供 3】早田公子氏

令和 3 年度 4 月に新規開校した伊豆の国特別支援学校では、学校教育目標を「良さが輝き、未来をひらく」と設定している。学校教育目標達成に向け、児童生徒が確かな学びを積み重ね、自らの良さを生きる力として輝かせながら未来を切り拓く人を目指すための実践を重ねている。本校では、個別の教育計画、教育課程、授業実践、それぞれを関連付けて組織的に実施・評価・改善を図るカリキュラム・マネジメントシステムを構築し、これを機軸とした学校経営計画を策定している。この中の具体的方略の一つが「ラーニングマップ」の活用であり、児童生徒の力を確かに育む授業実践において、何を学び得たかを明らかにする学習評価と、教育課程の評価・改善を結びつけるツールとして活用している。

この話題提供では、本校のカリキュラム・マネジメントシステムにおける組織的な取り組みの成果と課題、教員集団が目的意識を共有するためのカリキュラム・マネジメントの意義について検討する。

(倫理的配慮) 研究の実施にあたっては所属長の許可を得、教員には質問紙等配布時に説明を行い、質問紙の提出は任意とした。

(YAMAMOTO Kaoru, SASAHARA Yusuke, TATEISHI Nobuaki, Hayata Kimiko, KANNO Atsushi)